

『御製人臣傲心録』

「植黨論」

石 橋 崇 雄

はじめに

『御製人臣傲心録』は、清朝第三代の皇帝で北京遷都時の幼帝として広く知られる世祖順治帝福臨（在位1643～1661）が順治12（1655）年に自ら著した書物である。同書は満洲文と漢文との両版から成り、東京大学中央図書館のほか、北京に位置する中国第一歴史檔案館、北京図書館、中央民族学院図書館、中国科学院図書館などで実見した限り、通常はこの両版が一帙に収められている。但し清朝における満洲文と漢文との合璧本にしばしば見られる例と同じく、『御製人臣傲心録』の満洲文版と漢文版とでは記述内容の一部が相違することに留意しなければならない。ところで、『han i araha ambasai mujilen be targabure bithe.（皇帝[han]が作った臣下の心を戒める書物）』とある満洲文版の書名に象徴されているように、同書は従来、清朝の皇帝が臣下を諭した道德書の一類⁽¹⁾として扱われ、清朝史研究の分野では殆ど顧みられず、注目されることもなかった。

それでは、檔案類などの第一次史料を始め、清朝に関する史料類が多数利用できる現状にあって、同書を新たに切り上げる意義はどこにあるのか。思考すると、その意義は大きく次の二点にあると捉えている。その第一点は順治時代それ自体を検討しなおす上で重要となる順治12年に関する新たな知見が得られることであり、第二点は清初期⁽²⁾における政治思想や「党争」などの問題を再検討する上で重要となる新たな知見が得られることである。この二点について今少し言及しておきたい。

先ずは順治12年についてである。この年は、順治帝の遺詔に象徴される帝の親政とその政策方針とに係わる大きな意味を持っている。ところで順治帝の事績を記録した『世祖章皇帝実録』最終部分の巻144には、順治18（1661）年正月丁巳（7日）のこととして帝崩御の記載と遺詔（遺言）が収録されている。この遺詔からは、帝の親政における特徴とそれに対する当時の評価が顕著に窺える。全15項目からなる遺詔のうち、最後の項目を除いた14項目の末尾全てには、「是朕之罪一也（是れ朕の罪の一つなり）。」とみえるからである。即ち、この遺詔は帝の施策に対する帝自身の自己批判となっている。悠久の歴史を誇る中国の歴史は数多くの皇帝を輩出したが、管見の限り、自己批判の遺詔で実録が終わる皇帝の例は他にない。結論を先取りするならば、この遺詔は康熙帝時代の実録纂修時に挿入されたもので、順治帝自身の手になるものとは考えられていない。とはいえ、そ

五〇

ここには順治帝の親政を当時の周囲がどのように見ていたのかという点がそのまま反映されており、その意味でこの遺詔からは順治帝による親政の特徴をはっきりとみてとることができるのである。

順治帝による遺詔のうち、特に親政の特徴が窺える部分は第一と第十一の項目である。その第一項目の後半部分には、

且漸習漢俗，於淳樸舊制，日有更張。以致國治未臻，民生未遂。是朕之罪一也。⁽³⁾

且つ漸々漢俗に習い、淳樸なる旧制に日々更張あり。以て国治未だ^{いた}臻らず、民生未だ遂げざるを致す。是れ朕の罪の一つなり。(また徐々に漢民族のやり方に学ぼうとした結果、素朴で素晴らしかった満洲族伝統の制度が弛緩し、常に立て直さなければならぬような状況を生じてしまった。そのために、国政は不十分なことになり、民の望む理想的な生活も実現させられなかった。これは朕の罪の一つである。)

とある。ここから窺えるのは、順治帝が中国化政策を推進しようとした結果、満洲族伝統の制度が弱体化したという点である。そこにこそ帝の親政の本質があり、周囲はこの中国化政策を何よりも危惧していたと見るべきであろう。

具体的にはどのような方法で中国化政策を邁進しようとしたのか。この答えは遺詔第十一の項目から見出だせる。そこには、

祖宗創業，未嘗任用中官。且明朝亡國，亦因委用宦寺。朕明知其弊，不以爲戒。設立内十三衛門，委用任使，與明無異。以致營私作弊，更踰往時。是朕之罪一也。⁽⁴⁾

祖宗の創業、未だ嘗て中官を任用せず。且つ、明朝の国を亡ぼすも亦、宦寺を委用せるに因る。朕、其の弊を明知するも以て戒めと為さず。内十三衛門を設立し、委用任使せしめること、明と異ならず。以て私を営み弊を作すを致すこと、更に往時を踰ゆ。是れ朕の罪の一つなり。(祖父ヌルハチや父ホン＝タイジが国を興す際についぞ宦官を用いたことはなかった。加えて、明朝が滅亡したのは、宦官からなる役所に国政を任せたことに、その原因がある。朕はその弊害をよくよく知っていたが、そのことを自戒に為し得なかった。宦官で構成される内十三衛門を設立し、国政を任せたことは、明の場合と同様であった。そのため、宦官が私利を求め、弊害をもたらすことに至ったことは、明の往時よりも更に酷い状態であった。これは朕の罪の一つである。)」

と記されているからである。ここに取り上げられている宦官による政治機関である内十三衛門の設立こそが、中国化政策を推進しようとした順治帝による親政における象徴というべきものであった。

順治8(1651)年に親政を開始した帝は、ただちに清朝の体制整備に着手し、諸王の政治参与権を奪って帝の集権体制を強める目的から、政治の中枢を司る政治機関の設立に思い至る。諸王から政治参与権を奪って帝に直接移行すれば、全

面的政権闘争に直結しかねない。人から制度に移すのであれば、幾分かは緩和される。しかも最終的に中国皇帝の立場で公的かつ実質的に掌握するためには、その機関は宦官を用いるしかない。明の二十四衙門に倣って帝が順治11（1654）年に内十三衙門（単に十三衙門ともいう）を設立した目的と背景は、そこにあった。しかし、宦官の弊害で明が滅んだ直後である。宦官による政治機関の設立ということで、それまで順治帝に好意的であった明の旧臣らを含め、周囲の全ては帝に敵対することとなった。それにも拘らず帝の決心は固く、翌順治12（1655）年、宦官の弊害を未然に防止する勅諭⁽⁵⁾を刻した鉄牌を鑄造させ、これを紫禁城内に立てることで周囲の危惧を軽減させようとした。その上で帝は6年越しで十三衙門に関する規定を改訂・整備していき、順治17（1660）年、遂にほぼその集権化を完成させるまでに至るが、その矢先の翌順治18年1月7日、帝は病死したのである。

『御製人臣儆心録』の冒頭に付された序文に見える順治12年とは、この宦官の弊害を未然に防止する勅諭を刻した鉄牌を鑄造させた年にあたり、実際、『世祖章皇帝実録』の同年6月辛巳（28日）の条には「命工部立内十三衙門鐵牌。勅諭曰、…（工部に命じて内十三衙門の鉄牌を立たしむ。勅諭に曰く、…）」⁽⁶⁾とみえる。前年の順治11（1654）年に内十三衙門（単に十三衙門ともいう）を設立して以降、周囲の全てが帝を白眼視するなか、帝は欽定や御製の書物を次々に刊行する。即ち、翌順治12年には、『大清太祖武皇帝実録』、『大清太宗文皇帝実録』、『大清太祖武皇帝聖訓』、『大清太宗文皇帝聖訓』などを欽定で纂修させたほか、『御製資政要覧』⁽⁷⁾、『御製勸善要言』⁽⁸⁾、『御製範行恒言』、『御製内政輯要』、そして『御製人臣儆心録』を作成し、9月丙午（25日）には『御製資政要覧』、『御製勸善要言』、『御製範行恒言』、『御製人臣儆心録』各一部を文官三品以上に頒賜している⁽⁹⁾。さらにまた翌順治13年には、『御製表忠録』、『御製牛戒』、『御製内則衍義』を作成する。順治11年以降の親政を解明するためにこうした御製書や欽定書に対する分析・検討作業が必須条件となることは言をまたない。これら一連の書物のなかから最初に『御製人臣儆心録』を取り上げる理由は、冒頭に示した意義の第二点にある。第二点に移ろう。

清初期における政治改革が数多あるなか、政治思想や「党争」に係わる問題ということでは第五代皇帝の世宗雍正帝（在位1722～1735）による改革が広く知られている⁽¹⁰⁾。その改革は『御製朋党論』と『大義覺迷録』の両書⁽¹¹⁾などに象徴されているが、このうちの『御製朋党論』を順治帝の『御製人臣儆心録』と対比してみると、両書に多くの類似点があることに気付かされる。とりわけ『御製人臣儆心録』の本文冒頭に収録されている「植黨論」に顕著である。従って、雍正帝による政治改革の特徴を分析・検討する上においても、『御製人臣儆心録』の分析・検討作業が必須条件となるのである。

以上が、順治帝が作成した数多い書物の中から最初に『御製人臣儆心録』を取り上げた理由の骨子である。続いて『御製人臣儆心録』の分析・検討作業に入ら

なければならないところであるが、それに先立つ基礎研究の一環として、既に終えている『御製人臣懃心録』の訳出作業の結果について、先ずは「植黨論」を手始めに、順次公刊することにした。

註

- (1) 富麗『世界満文文献目録(初編)』(中国民族古文字研究会, 1983年10月北京刊)では「十九 哲学」に収録している(188頁, 収録番号19074)。
- (2) 清初期の時代区分については, 拙稿「マンジュ(manju, 満洲)王朝論 清朝国家論序説」(『明清時代史の基本問題』, 汲古書院, 1997年), 同「清朝国家論」(『岩波講座世界歴史13』, 1998年), 拙著『大清帝国』(講談社, 2000年)で示した。
- (3) 『世祖章皇帝実録』巻144 - 2葉
- (4) 『世祖章皇帝実録』巻144 - 4 ~ 5葉
- (5) 勅諭の全文は拙文「中国史の中の宦官」(『しにか』11 - 11, 2000年)に示した。
- (6) 巻92 - 12葉
- (7) 序文は同年正月丙午(21日)付け(『世祖章皇帝実録』巻88 - 12 ~ 13葉)
- (8) 序文は同年正月庚戌(25日)付け(『世祖章皇帝実録』巻88 - 17 ~ 18葉)
- (9) 『世祖章皇帝実録』巻93 - 16葉
- (10) 拙著『大清帝国』, 拙文「雍正帝の改革」(『しにか』13 - 1, 2002年)
- (11) 拙著『大清帝国』で言及したほか, 『御製朋党論』の本文は拙訳「満文『han I araha gucu hoki i leolen. (御製朋党論)』」(『国史館史学』4, 1996年)で示した。

『御製人臣懃心録』 「植黨論」

凡 例

- 一, 『御製人臣懃心録』の訳出作業にあたっては, 一般に満洲文版を完成させた後に漢文版を完成させていたとされる順治年間の時代背景を考慮し, 満洲文の原文を P. G. von Möllendorff, "A Manchu Grammar." (上海, 1892年) の方式でローマ字転写し, 日本語の拙訳を付すと共に, その後に漢文の原文を示した。
- 一, 満洲文・漢文における () 内の数字は, ローマ数字が各原文の葉数, 算用数字が各原文の行数で, a は葉の表, b は葉の裏を示す。また改葉・改行は共に / で示した。
例: (Ib - 4 / a - 1) … 原本の1葉裏4行目から2葉表1行目に移行。
- 一, 満洲文の原文における句読点については, 単点はコンマ, 二重点はピリオドで示した。
- 一, 日本語訳では出来るだけ満洲文における原文の構造を尊重した。なお, 適宜, 段落を区切ったほか, [] 内に訳者による補足を示した。
- 一, 『御製人臣懃心録』原本の構成に従い, 題箋, 序文, 目次, 本篇・書名に続いて, 本文の冒頭に収められている「植黨論」を示した。

題箋

han i araha ambasai mujilen be targabure bithe.

皇帝 [han] が作った臣下の心を戒める書物

御製人臣儆心録

序文

(Ia - 1) han i araha ambasai mujilen be targabure (1 / 2) bithei sioi. (2 / 3)

皇帝 [han] が作った臣下の心を戒める書物の序

(Ia - 1) 御製人臣儆心録序 (1 / 2)

bi gūnici, amban oho niyalma, (3 / 4) beye be ilibure, yabun be (Ia - 4 / Ib - 1) dasarangge, emu mujilen ci tucimbi. (1 / 2) mujilen tob oci tondo sijirhūn (2 / 3) ombi. geren sain isambi. tob (3 / 4) akū oci jalingga butemji (Ib - 4 / a - 1) ombi. geren ehe jimbi. tuttu (1 / 2) ofi mujilen serengge tumen baitai (2 / 3) fulehe. sain ehe i tucire (3 / 4) ba kai.

朕が考えるところ、臣下となった者が自身を立て行いを改めることは一つの心から出ている。心が公正であれば忠義で実直となる。幾多の善が集積する。公正でなければ腹黒く陰険となる。幾多の悪がもたらされる。このため、心というものは万事の根本であり、善悪の出どころなのである。

朕惟、人臣立身制 (2 / 3) 行、本諸一心。心正、(3 / 4) 則爲忠、爲直、衆美 (Ia - 4 / Ib - 1) 集焉。不正、則爲姦、(1 / 2) 爲慝、羣惡歸焉。是 (2 / 3) 故、心者、萬事之本、(3 / 4) 美惡之由出也。 (Ib - 4 / a - 1)

damu baitai hacin geren. (a - 4 / b - 1) mujilen, emken de akūmbumbi. (1 / 2) gurun de emu oci, boo be (2 / 3) onggombi. ejen de emu oci, (3 / 4) beye be onggombi. ente-kengge, (b - 4 / a - 1) gebu iletulere, beye derengge (1 / 2) ojoro teile akū, gurun boo (2 / 3) inu hing seme akdambi kai. (3 / 4)

但し、事の種類は幾多もあるのに、心は唯一つで尽くさなければならない。国に対して唯一つになれば、家を忘れる。君主 [ejen] に対して唯一つになれば、自身を忘れる。このようであるので、名を上げ自身が面目をあげられるというだけではなく、国や家も亦厚く頼っているのである。

顧事有殊塗、心惟 (1 / 2) 一致。一於國、則忘 (2 / 3) 其家。一於君、則忘 (3 / 4) 其身。如此者、不特 (a - 4 / b - 1) 名顯身榮。邦家亦 (1 / 2) 允賴之矣。

jai jalingga koimali urse, hoki (a - 4 / b - 1) jafari cisu be kiceme, toose de (1 / 2) ertufi dasan be facuhūrangge, (2 / 3) dubentele beye gebu gemu efujefi, (3 / 4) gurun de jobolon i tangkan ombi. (b - 4 / a - 1)

もしも腹黒く狡猾な輩が党を牛耳って自分勝手に暴走し、権力を頼みに政治を乱すことがあれば、結局のところ、自身と名とを俱に滅ぼし、国における禍の端緒となる。

若夫姦 (2 / 3) 邪之流、樹黨營私、(3 / 4) 枯權亂政、卒至身 (b - 4 / a - 1) 名俱喪、爲國厲階。 (1 / 2)

ere gemu daci mujilen be tob (1/2) obuha ba akū ofi, emgeri (2/3) horon aisi be baha-me, uthai (3/4) hūlimbume liyeliyefi hūlhi (a - 4 / b - 1) facuhūn ofi, cokto dabali be (1/2) cihai yabume, dergi de han i (2/3) fafun be necime. fejergi de (3/4) amban i jurgan be jurceme. (b - 4 / a - 1) embici horon arame asha dethe (1/2) banjibumbi. embici ehe de (2/3) dayafi surteme faššme yabumbi. (3/4)

これは全て当初から心を公正にしたことがないために、一度権勢や利を手に入れると、たちどころに惑わされて目が眩み、朦朧となり錯乱して、驕慢で僭越なことを自分勝手に行い、上に対しては王者 [han] の法規を侵犯し、下に対しては臣下の節義に背き、あるいは権勢を築いて側近を羽や翼の様に生じさせる。あるいは悪人に擦り寄って我先にと暴走する。蓋縁居恒無正心 (2/3) 之功。一當勢利，遂 (3/4) 昏迷瞽亂，狂肆驕 (a - 4 / b -) 矜，上昧王章，下垂 (1/2) 臣誼。或作威而聯 (2/3) 羽翼，或比匪而效 (3/4) 奔趨。

tantai, sihan, jalan jalan i fe (a - 4 / b - 1) amban ofi, gosire kesi be (1/2) alifi goidaha bime, karulara be (2/3) gūnirakū, gūnin i cihai balai (3/4) yabume, etuḥšeme salifi yasa de (b - 4 / a - 1) hešen fafun akū bihe.

譚泰や石漢は代々続く旧臣で、慈しみの恩を受けて久しいにもかかわらず、恩に報いることを考えず、思うがまま好き放題自分勝手に振る舞い、我儘を押し付けて、目に綱紀は映っていないかった。

如譚泰，石漢，(b - 4 / a - 1) 以累世舊臣，久叨 (1/2) 恩遇，不思圖報，逞 (2/3) 臆橫行，跋扈自恣，(3/4) 目無綱紀。

cen ming (1/2) hiya emu buya bithesi bime, (2/3) dabali iletuleme baitalafi, akdafi (3/4) afabuhangge šumin ujen, kesi šang (a - 4 / b - 1) jiramin ambula bihe. nememe baili be (1/2) cashūlafi hoki jafame, fafun be (2/3) yohindarakū dergi be eitereme (3/4) yabuha.

陳名夏は一介のつまらない儒者であるのに、分を過ぎてあからさまに拔擢されて登用され、信頼されて任用されたことは深く重く、恩賞は厚く大きかった。にもかかわらず恩情に背いて党を立てて牛耳り、法規を軽んじ、上を欺いた。

陳名夏，(a - 4 / b - 1) 則一介豎儒，驟蒙 (1/2) 顯拔，倚任深重，賜 (2/3) 賚優隆，而乃背德 (3/4) 植交，蔑法罔上。此 (b - 4 / a - 1) 皆自作罪孽，以致 (1/2) 隕厥身家。

bi duleke julge be (b - 4 / a - 1) aname kimcici, buya niyalmai gurun be (1/2) sartabuhangge jalan tome bi. (2/3) hanciki baita be tuwaci, geli (3/4) gehun buleku umesi iletu, enteheme (a - 4 / b - 1) targacun obuci ombi.

朕が過ぎ去った古について一つ一つ精査したところ、つまらない者が国を惑わせ乱すことは時代ごとにある。近時の事例を見ても亦、明確な手本が極めてはっきりと現れており、永く戒めに行うことができる。

朕歷稽 (2/3) 往古，宵人誤國，代 (3/4) 代有之。觀諸近事，(a - 4 / b - 1) 復炯鑒昭然，足爲 (1/2) 永戒。

amaga (1/2) amban oho urse, aikabade (2/3) ungkebuhe sejen i songko be (3/4) kemuni yabume, ejen i kesi be (b - 4 / a - 1) urgedefi, da gūnin be halafi, (1/2) beye erun fafun de tuhenche (2/3) manggi, aliyaha nasaha seme amcarakū (3/4) ojarahū seme, tuttu turgun (a - 4 / b - 1) arbun be feteme leoleme tucibufi, (1/2) emu bithe banjibume arafi, (2/3) ambasai mujilen be targabure (3/4) tacihiyan obuha. (b - 4 / a - 1)

将来、臣下となった者たちが、時に正反対の轍をなおも踏み、君主 [ejen] の恩に背いて当初の意思を変え、自身が刑罰や法規の対象に堕ちた後に後悔して嘆き悔んだとしても後の祭りでどうにもできないので、このように事の関わりと状況についてその根本を探るために論証した結果、一冊の書物を編纂して臣下の心を戒める訓えにした。

恐後之爲臣 (2/3) 者、或仍踏覆轍、負 (3/4) 主恩而渝素志、至 (b - 4 / a - 1) 於身罹刑憲、悔悼 (1/2) 無由。故推原情状、(2/3) 而論列之、錄成一 (3/4) 編、以爲人臣儆心 (a - 4 / b - 1) 之訓云。(1/2)

ijishūn dasan i niohon honin (1/2) aniya, niyengniyeri dubei biyai (2/3) sain inenggi araha. (a - 3 /)

順治の乙未 [12] 年、春季末月の吉日に記した。

順治乙未季春望 (2/3) 日序 (b - 3 /)

目次

(Ia - 1) han i araha ambasai mujilen be targabure bithe. (1/2)

皇帝 [han] が作った臣下の心を戒める書物

(Ia - 1) 御製人臣儆心録 (1/2)

leolen i ton. (2/3)

論の題目

論目 (2/3)

hoki jafara. (3/4)

党を立てて牛耳る。

植黨 (3/4)

gebu de amuran. (4/5)

名に執着する。

好名 (4/5)

cisu be kicere. (5/6)

自分勝手に暴走する。

營私 (5/6)

aisi de dosire. (Ia - 6 / Ib - 1)

利に走る。

徇利 (Ia - 6 / Ib - 1)

gūnin cokto. (1 / 2)

考え方が驕慢である。

驕志 (1 / 2)

holo be deribure. (2 / 3)

嘘を言い始める。

作偽 (2 / 3)

horon be dayara. (3 / 4)

権勢を頼みとする。

附勢 (3 / 4)

tušan be sartabure. (Ib - 4 /)

職務を怠る。

曠官 (Ib - 4 /)

本篇・書名

(Ia - 1) han i araha ambasai mujilen be targabure bithe. (1 / 2)

皇帝 [han] が作った臣下の心を戒める書物

(Ia - 1) 御製人臣儆心録 (1 / 2)

本文

hoki jafara be leolehengge. (2 / 3)

党を立てて牛耳ることについて論じたこと。

植黨論 (2 / 3)

jurgeci ebsi gurun boo i taifin necin i (3 / 4) dasabuhangge, gemu amba ajige hafasa emu mujilen (4 / 5) uhei hūsun i ojoro jakade, eiten baita mutebufi, (5 / 6) tuttu enteheme elhe goidame taifin ofi (Ia - 6 / Ib - 1) maktacun be mohon akū werihebi.

古よりこの方、国家を太平に治めさせたことは、全て大小の官吏が同じ心で一丸となって力を尽くしていたことから、一切の事務を円滑に動かすことができ、あのような永きに亙る平安の続く太平となったのであり、称賛は極まりなく広がり残されてきている。

自古國家太平之治、率由大 (3 / 4) 小臣工、協力和衷、以熙庶績。(4 / 5) 乃能久安長泰、流譽靡窮。

damu amban i (1 / 2) doro emu hacin waka.

但し、臣下の道理は一樣ではない。

顧 (5/6) 爲臣之道, 其類不一。

amba muru, hoki hebe be (2/3) iliburakū, untuhun gebu be buyerakū, beyei cisu be (3/4) kicerakū, ulin aisi be dosidarakū, ginggun i (4/5) yabun be dasara, unenggi i dergi ba weilere, (5/6) sijirhūn teng seme beye be ilibure. kicebe (Ib - 6/ a - 1) olhoba i tušan be faššarange, umesi oyonggo (1/2) uttu oci, yabun tondo, tacin tob ofi gung (2/3) šanggambi. unenggi amban seme saišaci, inu (3/4) yertecuke ba akū.

大要を示せば、党や党派を立てず、虚名を欲せず、自身の私欲に走らず、財貨や利益を貪らず、敬いによる行いを身に付け、誠をもって上の場所に仕え、正直に堅実に身を立て、勤勉に慎み深く職務に尽力することこそが、緊要である。このようであれば、行いは偏らず、教えは公正になって、功績が成就する。誠実な臣下と賞賛されることで、これまた恥じるところが無くなる。

大約不 (Ia - 6/ Ib - 1) 植黨與, 不愛虚名, 不營己私, (1/2) 不貪賄利, 敬以飾躬, 誠以事 (2/3) 上, 耿介自立。勤慎蒞官, 其至 (3/4) 要者矣。若此, 則品行以端, 學 (4/5) 術以正, 而功業以成, 稱曰純 (5/6) 臣, 庶幾無愧。

miosihon amban ohode (4/5) tuttu akū. terei jemden be deribure hacin (5/6) geren bicibe, eiterecibe hoki jafara ci (a - 6/ b - 1) amba ningge akū.

邪まな臣下になるとこのようではない。自らの邪まな欲望を始められる事柄が幾多もあるために、大抵は党を立てて牛耳ることより大事なことがなくなる。

彼邪臣則不然。 (Ib - 6/ a - 1) 其作惡也多端, 而要莫大乎 (1/2) 植黨。

tuktan dosire de kemuni (1/2) ajige tondo, ajige akdun i beye gebu be (2/3) holtome miyamifi. han niyalmai dasan de gūnin (3/4) sithūha ucuri be tuwafi, ini arga be (4/5) uncame sara gosire be baimbi.

一旦始めて進みだすと、常に僅かな忠義と僅かな信義によって自身の名を偽れるよう粉飾して、君主 [han niyalma] の政に注意し、機会を見てはその策謀を売り付け、知られて愛されることを求める。

當其始進, 每以小忠小 (2/3) 信, 矯飾身名。乘人主銳意圖 (3/4) 治之時, 巧售其術, 以邀知遇。 (4/5)

han niyalma (5/6) unenggi mujilen i akdafi afabume kenehunjerakū be (b - 6/ a - 1) dahame, jabšan de oyonggo babe ejelere baitai (1/2) toose gala de ojoro ohode, terei han i šang (2/3) fafun be hūlhafi, emu beyei horon algin be (3/4) cihai yabubume. cisui gucu be ambula ilibufi, (4/5) asha dethe obumbi.

君主 [han niyalma] は誠実な心によるものと信じ、任用して疑いをもたないため、運よく急を要することを掌握している事務の権力を手にすることになれば、そこから君主 [han] の賞罰を妄りに操作し、一介の身の威勢と名声を思うがままに動かし、私的な朋輩を多数集めては側近として羽や翼の様にする。

人主推誠以任, 待之不疑, 倖 (5/6) 據要津, 事權在握。於是假王 (a - 6/ b - 1) 朝之

刑賞，逞一己之威靈，廣（1/2）樹私朋，以爲羽翼。

oilori tondo be (5/6) tukiye miosihon be unggire, gebu be anagan (a - 6 / b - 1) arafi, dorgideri adalingge de hokilafi (1/2) encungge be tuhebure arga be yabume. beye de (2/3) dayahangge be, maktame yarume wesihun iletu de (3/4) isibumbi. beye ci fudarakangge be, ehacume (4/5) sihame weile jobolon de tuhebumbi.

謀らずに公平さを示せる邪まな心で仕えての名声に託け、裏では似た者同士で結党してそれとは異なる者を罪に陥れる策謀をめぐらし、自身に擦り寄ってくる者は誉めそやして後押しし、上位にあからさまに就かせる。自身に逆らう者は誹謗して追い詰め、罪科に陥れる。陽託擧直（2/3）錯枉之名，陰行黨同伐異之（3/4）計。附已者，譽而援之，躋於通（4/5）顯，逆已者，毀而攻之，陷於罪（5/6）戾。

terei gūnin, (5/6) dacun sijirhūn saisa be yooni unggifi, yaya (b - 6 / a - 1) hafan tere, funglu alire niyalma be, urunakū (1/2) gemu ini duka ci tucime oho manggi teni (2/3) elembi.

その想いは、才能のある正直な賢者を悉く去らせて、諸々の官に就いて俸禄を受け取る者については、必ず全て自分の門下から出て就かせた後に、ようやく満足する。

其意將使蹇諤之士，盡去（ b - 6 / a - 1）朝端，凡析圭擔爵之人，必皆（1/2）出其門而後已。

ulhiyen i bihei inenggi goidaha manggi, (3/4) ehe i duwali ulhiyen i badarafi, gurun i baita (4/5) ulhiyen i efujembi. jobolon i selgiyebure be (5/6) gisurehe seme wajimbio.

次第にそうになっていく日々が長くなると、悪い朋輩が次第に蔓延っていき、国の事務が次第に崩壊していく。禍の連鎖を語っても終ろうか。

浸淫日久，而（2/3）匪類漸滋，國事漸壞。流禍可（3/4）勝道哉。

gūwa hendume, hoki (a - 6 / b - 1) jafara jobolon uttu kai. emteli simeli emhun (1/2) ilifi, kani akū oho manggi teni saiγūn. (2/3)

別人が言うのに、「党を立てて牛耳る禍はこうであったのである。ただ一人、貧苦のまま孤独に老いて残り、仲間もいなくなったような状態の後、それでも好いか。」と。

或曰，植黨之禍，既如（4/5）此矣，將踽踽涼涼，獨立無耦，（5/6）而後可乎。

四
— julgei niyalma hafu doro be gisurere de, (3/4) gucu gargan de hajilara be, dubede dabuhangge (4/5) geli adarama. hendume, tuttu waka. inu meni meni (5/6) ujen be bodombi dere.

古の者が、貫く道理について語るのに、「朋友と親交を結ぶのは、結局のところ打算も亦どうなのか。」と。言うところ、「そうではない。これまた、各々の重要さを測っているのにほかならない。」と。

古人之言達道，終（ a - 6 / b - 1）及朋友之交，則又何也。曰，不（1/2）然。亦各權其重耳。

yaya niyalma, gašan (b - 6 / a - 1) falan de bici, guci jurgan be ujelembi. meiren (1/2) adafi ejen be weileci, amban i jurgan be (2/3) ujelembi. amban i jurgan be ujeleci, guculehe (3/4) babe dahūme gisureci ojarahū.

全て人というものは、村里にあれば朋友を重んじる。肩を並べて君主 [ejen] に仕えれば臣下の節義を重んじる。臣下の節義を重んじれば、友として交わっていたことを蒸返して論じることはいない。

夫人平居 (2/3) 里閭、則重友誼。比肩事主、則 (3/4) 重臣節。重臣節、即不得復論 (4/5) 交情。

tuttu ofi (4/5) ambasa saisai ejen be weilerengge, ainame (5/6) acaburakū, enculere be bairakū. terei mujilen (a - 6 / b - 1) damu yamji cimari heolederakū emu niyalma be (1/2) weilere be gūnimbi.

このようであるので、君子が君主 [ejen] に仕えることは軽率に迎合できないし、自分だけでも求められない。その心はただ、夜も朝も怠りなく一人に仕えることを考えるだけである。

是以君子之事君也。不 (5/6) 苟爲同。不求爲異。其心祇知 (b - 6 / a - 1) 夙夜匪懈、以事一人而已。

tuttu kungdz i henduhengge, (2/3) ambasa saisa neigelembime, giyalarakū. hūwakiyasun (3/4) bime adali akū sehebi.

それ故に孔子が説いたことには、「君子は公平に交わって分け隔てをしないし、人と和合しても付和雷同しない。」と言っている [『論語』「為政第二」・「子路第十三」]。

故 (1/2) 孔子曰、君子周而不比。和而 (2/3) 不同。

inu ai hoki (4/5) jafara ba bi.

これまた、どうして党を立てて牛耳るところがあろうか。

亦何植黨之有。

šūn han i orin juwe amban, (5/6) ememungge inu ememungge mujangga seme, ememungge (b - 6 / a - 1) wakalame ememungge anahūnjahabi. tere fonde dur (1/2) seme isaha geren ambasa umesi hūwakiyasun bihengge, (2/3) gucu akū mujanggao. amaga jalan hoki seme tuwaci (3/4) ojarahū.

舜帝 [han] の二十二人の臣下は、あるいは「ああ、正しい」と、あるいは「全くその通り」といい、あるいは非を咎め、あるいは譲っていた [『書経』「益稷」]。その時にどっとなって、集っていた幾多の臣下がこの上なく一つになっていたことは、朋友がいなくても全く同じに違いない。後世から党と見做すことはできない。

如虞廷 (3/4) 二十二人、或都、或兪、或吁、或 (4/5) 讓、其時師師濟濟、庶尹允諧。

(5/6) 夫豈無朋、而後世不得目之 (a - 6 / b - 1) 爲黨。

tang gurun i li fung gi dasan be ejelefi (4/5) toose be salifi, jang wen sin, li hiyūn, li

(5/6) sioi jy, li ioi, lio si cu, giyang jy, jang kiowan (a - 6 / b - 1) ioi, ceng si fan i jergi urse be yarume (1/2) baitalafi, oyonggo baitangga bade dendeme sindafi, (2/3) horon, dorgi tulergi de durgefi, tob sijirhūn be (3/4) beleme tuhebuhebi.

唐国の李逢吉は、政治を掌握して権力をほしいままにし、張文新、李訓、李續之、李虞、劉栖楚、姜治、張權輿、程昔範という輩を後押しして任用し、緊要な政務を行う地に分けて置き、権勢は内外を震撼させ、正直な者を欺き陥れたのである。

若唐之李逢吉、秉政擅 (1/2) 權、引用張文新、李訓、李續之、(2/3) 李虞、劉栖楚、姜治、張權輿、程 (3/4) 昔範之徒、分布要劇、勢震朝 (4/5) 野、傾陷正直。

li dzung min, li de ioi be (4/5) ibiyame, nio seng zu se be yarume baitalafi (5/6) ashūme bošoro jakade, li de ioi inu li (b - 6 / a - 1) dzung min i baru meni meni gucu duwali dendeŋi (1/2) ishunde tuhebume gidame yabuhai, ini ejen be, (2/3) ho be ba i hūlha be unggici ja, gurun i (3/4) dorgi hoki be unggici mangga seme sejilebuhebi. (4/5) tang gurun i doro ereci mukdekekū.

李宗閔は李徳裕を嫌い、牛僧孺らを後押しして任用し、[李徳裕を] 放逐しようとしたので、李徳裕も亦、李宗閔に対抗し、各々朋党を分立させて相互に陥れようとぶつかり合っていた。その君主 [ejen] に、「河北の地の賊を取り除くのは容易く、国内の党を取り除くのは難しい。」と嘆かせていた。唐国の政道はこれから立ち行かなくなった。

李宗閔、惡李徳 (5/6) 裕、則引用牛僧孺等、以排擯 (b - 6 / a - 1) 之。而徳裕亦與宗閔、各分朋 (1/2) 黨、更相傾軋、致使其君、興歎 (2/3) 於去河北賊易、去朝中黨難。(3/4) 而唐祚因之以不振矣。

sung (5/6) gurun i jang dun, dergi be eitereme cisu be (a - 4 / b - 1) yabume, ts'ai biyan, lin hi, jang šang ing, hūwang (1/2) li, lai jy šoo, jeo jy, šang guwan giyūn se be (2/3) yarume baitalafi, oyonggo bade sindafi, gisun i (3/4) tušan de obufi, uhei hebei jalingga de (4/5) hokilafi, kimun korsocun be karulahabi.

宋国の章惇は上を欺き私欲に走り、蔡卞、林希、張商英、黄履、來之邵、周秩、上官均らを後押しして任用し、要地に置いて言うがままに職務を動かし、共謀による奸計のために結党して、仇と恨みで報復していた。

宋之 (4/5) 章惇、罔上行私、引用蔡卞、林 (5/6) 希、張商英、黄履、來之邵、周秩、(a - 6 / b - 1) 上官均等、居要地、任言責、協 (1/2) 謀朋奸、報復仇怨。

ts'ai ging, (5/6) ts'ai io ama jui bakcin ofi, meni meni duka (b - 6 / a - 1) uce ilibufi.sung gurun inu tereci wasikabi. (1/2)

蔡京、蔡攸は父と子で敵対して各々門戸を立て、宋国も亦、それから衰えた。
而蔡京、蔡 (2/3) 攸、至於父子爲敵、各立門戸、(3/4) 宋亦以衰。

ai, beye dubentele mujilen hūsun be, ejen be (2/3) weilere, irgen be gosire de baitalarakū, gucu (3/4) elbire hoki jafara de baitalame. tušan be (4/5) akūmbure, dasan be yabubure de baitalarakū, (5/6) jalingga be haršara, saisa be silhidara de (a - 6 / b - 1)

baitalame. dubentele emu erin de ehe badarafi, (1/2) tumen jalan de nantuhūn werihe.

ああ、自身が終るまで心の力を、君主 [ejen] に仕え、民を慈しむためには用いないで、朋輩を集めて党を立てて牛耳るために用い、職務に専念し、政務を遂行するためには用いないで、奸計に走り、賢者を嫉むために用い、結局は一時のために悪を大きくしたことで、万世に穢れを残した。

嗟乎。以終身之心 (4/5) 力、不用之致君澤民、而用之 (5/6) 呼朋樹黨、不用之服官行政、(b - 6 / a - 1) 而用之怙姦嫉賢、究乃毒釀 (1/2) 一時、穢流萬世。

horon toose de (2/3) mohon bi. cifelere basurengge dube akū. ai (3/4) tusa oho. gurun bisire urse de, enteke (4/5) ambasa bihe seme inu ai tusa ni.

権勢や権力には終りがある。唾を吐き笑い飛ばすことは際限がない。何の利益になったのか。国事にある者たちがこのような臣下であっても亦、何の利益なのか。

勢權有盡、唾 (2/3) 笑無窮。夫何益哉。彼有國者、(3/4) 亦奚利有此臣哉。

ere hoki (5/6) jafara demun. amban oho niyalmai šumin targaci (b - 6 / a - 1) acarange kai. (a - 1 /)

これが党を立てて牛耳る異様さであり、臣下となった者が深く戒めなければならないことなのである。

此植黨之 (4/5) 風、人臣所當深戒者也。(a - 5 /)

(東洋史学専攻・教授)